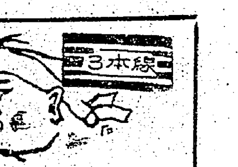
## CO闘争の中から

第二回

# 励まし、はげまされながら各地で見出した同志たち

CO家族の会　塚本栄子さん



### 仲間のために…と

塚本栄子さんのご主人清さんは五十八才、停年直前の昭和三十八年十一月九日、自宅で休んでいるときに三川鉱大爆発がおきた。

子どもたちが「父ちゃんは年じゃけん、もう救助に行きなさんな」と止めるのを、「オレが坑内で倒れているのを見すてられたらどうするか」としかりとばし、三川鉱に直行して先頭に立って下がっていった。

塚本さんの必死の救助作業は多くの仲間たちの生命を救ったが、なお坑内に充満していたCOガスは素面の塚本さんの体内にまで入りこみ、それ以後CO中毒にかかってしまった。

こんな塚本さんを労災病院の安河内所長は「組合原性病」の名のもとに強制退院をさせてしまい、昭和四十一年十月には万田回復訓練所に通院中の塚本さんにまで「労災補償打切り」の通知がまいこんだ。

栄子さんの闘いはここからはじまった。

オルグで訴える

塚本さん

### 結ばれた友情のかずかず

家族の会の中でもオルグにでる機会が多かった栄子さんは行った先々で境遇と志を同じくする多くの仲間と知りあい、いまでも文通をつづけている。

栄子さんがご主人のCO問題を通じて叫びつづけた「人間の叫び」は多くのこだまとなって帰ってきている。

その一人、吉川あき子さん（四十八才）は生野鉱山で仂いていたご主人が落盤にあい、七年間寝たきりの生活をつづけている。二人の子どもをかかえた吉川さんは兵庫県評主婦の会オルグとして仂きかつ運動をつづけている。

吉川さんはつぎのような便りをよせている。

「この間から風邪をひいて、気持までめいってしまい、ついねむれないでお薬を沢山のんだりして生きてても仕方がないなど馬鹿なことを考えたりしていましたが、ちょうど一昨日、江田三郎さんから

つよい心がなければ、生きていけない。あたたかい心がなければ、幸せはえられない

と書いた色紙が届き、勇気づけられました。もう大丈夫です。また頑張りますからご放念下さい。

あたたかき　はげましのことば　おくられて　よわりしこころ悔やまれるきょう

こころよわり　日ごと無口に　なる夫に　かなしむわれに色紙うれしく」

また、つぎの便りには

「最近は、雨がすくなくて暑いので、とうとうたまりかねて、少さなクーラーをつけてやりました。（寝たきりの主人に）気嫌よく少しでも長生きしてもらわないと困りますので。ときどき腹を立てながら貴女のことを思いだしています。暑さがきびしいとCO患者の方々も大変でしょう。なにとぞお気をつけてあげて下さい」

る。

### ″私の体内で人間性が目覚めた″

同じ文通の相手である秋戸きよ子さんは千葉市に住む四十二才の婦人である。秋戸さんのご主人は船員であったが、ある航行で台風にあい、船の中にたたきつけられて半身不随になってしまった。三年間は治療もできたが、それ以後は労災補償が打ち切られ治療もできず生活も苦しくなり、ついに離婚、子どももバラバラになってしまった。

その秋戸さんが千葉市の社青同の若者たちに引っぱられ、バルづとめから社青同の同盟員にとびこんだのはつい最近、そこに栄子さんたちの家族の会オルグ団があらわれた。

これは秋戸さんからの手紙である。

「駅前をゆきかう人に呼びかける　三池の主婦の生きる雄々しさ

日夜の闘争ご苦労さまです。当地においでのときは何らお役に立てず本当に申し訳けないと存じます。大なり小なりみなさまと同じ苦しみに泣いていた私なのに、闘うすべも知らず、ことなかれ主義で今日まですごしてきましたことを、ただただ恥入るしだいです。

同じ人間として、まして同じ女の立場から許されるべきでないことを深く反省いたしております。これからもみなさまのお力添のもとに私も人間らしく生きるため、がんばりたいと思います。

さて今日はみなさまに明るいニュースをお知らせいたしたいと読みずらい字を書きならべております。十一月三十日みなさまとはじめてお会いしたあの県本部の同じ部屋に「石蕗の会」という学習の場が誕生しました。社会党・社青同のみなさんのお力添は申すまでもありませんが、みなさまとお会できたあの日から急に結成されたのも、一重にみなさまのお蔭と感謝いたしております。みなさま方の闘う何者にも恐れぬ決意が若者の視野を広げたものと信じます。むろん「石蕗の会」の名前も三池の高椋竜生詩文集よりいただいた名前です。

命をかけ日夜闘う三池の多くの仲間たちのいることを若者の胸にきざんでおきたかったからです。

また、その中から世の多くの労仂者と手を取り合っていける人間になってもらうためにもです。

生れたばかりの石蕗の会は、いつ壁につきあたるか知れませんが、私たちが、若者たちが本当に人間らしく生きていくためにも、この石蕗の合は育てていきたい　と思っております」

これはつぎの手紙である。

「聞く物、読む物、お便りの中に、家族ぐるみの闘いを命かけての闘いを、知れば知るほど自分の足が地についていない生活を本当に恥しく、お便り書く手もにぶり勝りとなります。

四十年間、私の体内でねむりつづけていた人間性とでも申し上げますか、それがいま、目ざめたとでもいう気持です。私の右手右足はときにより私の行動を無視し不自由の座にすわらせますが（秋戸さんは右手、右足が不自由である…編集部注）私の命がある限り私の口は人間の自由を得るために闘いの言葉をいいつづけるでしょう

私もできるかぎりみなさまのご指導のもとに、いままでのようなアヤツリ人形から生きた人間として生き抜くつもりです。よろしくお願い申し上げます。先日、第一回の学習がはじまりました。三里塚の空港問題でした。右も左もわからなかったこの若者たちが何の抵抗もなく政治問題にとびこめたのもみなさまのお蔭と思っています。現在十二名ですが、この中の六名が本当に自分に目ざめたとき彼の右手には彼の仲間をしっかりにぎりしめていることでしょう」

塚本さんは手紙をみながら、CO闘争の足あとをかみしめている「世の中には同じ苦しみの人が多いことを知りました。そしてその人々と互いに励ましたり励まされたりしながらやっています」と語っている。

---

# ″COも原爆も同じ苦しみ″

## 成功した「三池の闘い」長崎公演

### 現地で民宿も

合唱詩劇「三池の闘い」長崎公演は、長崎地区労の春闘決起集会の第二部として三月十四日、長崎市公会堂で行なわれた。

会場は長崎地区の労仂者千人で埋まり、身じろぎもせず劇に見入ったが、とくに長崎造船労組のように会社の分裂攻撃で苦しむ労仂者からは、劇の一つ一つの場面にはげしい激励やヤジがとび、会場は熱気にあふれた。

三時間の上演時間はまたたく間にすぎ、劇は去りやらぬ観衆から長い拍手をあびた。

劇の出演者は十四日の夜、長崎地区労組合員三十五名の家に分宿し、夜おそくまで交流をつづけた。公演先での民泊ははじめてのことであったが、この民泊交流は多くの成果をあげた。

出演者の一人高椋さんは、つぎのように語っている。

「私は長崎造船の第一組合員である城谷さんの家に泊りましたが城谷さんは原爆被爆者です。原爆が長崎に落ちた日、城谷さんは七人家族のうちたった一人、机の下じきになっていて助かったそうです。机の下からはい出した城谷さんは、家族のだれを助けようもなく、焼けただれた親兄弟の顔を一人ひとりたたいてまわったそうです。『三池の闘い』の第二部の三川爆発の場面で、死んだ同僚の顔をたたく場面がありますが、それを見たときは二十三年前の原爆の日を思いだしてたまらず、それから劇がどんなに進んだかサッパリわからなかったそうです」

「三池の闘い」長崎公演は、原爆や労仂組合弾圧を体験した長崎地区労仂者に深い感動を与えた。長崎地区労の総括会議の中では、今年の「原水禁世界大会」で上演しようという話も進んでいる。

### 佐賀、宮崎公演も

「三池の闘い」公演は、三月二十四日に佐賀市で、四月四、五、六日には、それぞれ日南市、宮崎市、延岡市での公演が予定されている「三池の闘い」公演とあわせて「CO・遺族を守る会」のとりくみも併行して行なわれている。

---

# ドカンと一発!!

## マイトばなむんな!!

三川

最近身ぶるいするような、連続的なマイト爆発未遂事件がぼっ発している。大きな災害の前ぶれを思わせてならない。

去る一月二十二日、上層三十六右三片の上段採掘跡岩巻から下段へストンとこぼれ落ちたフライアッシュの中から、なんと雷管を装てんしたマイト十五本が二番方で発見された。

それというのも、いつもと重さが違うぞという危機一発のところで判明した。

**【坂田係長談】** 係員が忘れたものでしょう。十二月十六日のものでした。いずれにしても係員の不手際です。

### マイト違反は違反を呼ぶ

二月一日、同じく上層三十六左二片下段払入口で、これまたピースが装てんされたマイト二本が、常一番で発見されました。

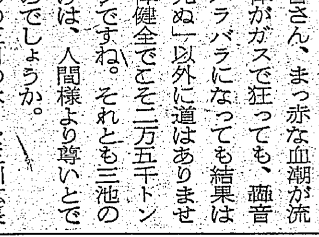
**【野田主席談】** なんとも申し開きができません。これまでやかましくいってきたのですが、このような結果をまねきました。本人にこの事実を確認させたうえ、二月三日（土）全係員に発破及び取り扱いに関する教育を一時間徹底してやりますので了解して下さい。

×　　×

さて皆さん、まっ赤な血潮が流れる五体がガスで狂っても、轟音と共にバラバラになっても結果は同じ「死ぬ」以外に道はありません。五体健全でこそ二万五千トンウンヌンですね。それとも三池の石炭だけは、人間様より尊いとでもいうのでしょうか。

ことしの正月の休日を三川鉱長は本社でカンズメにされました。「倉岡君、二万二千トン日産をだなあ、目標ではなく実績でどう出すかだよ君ィ。計画書をつくりたまえ。出世するか、退転かだ！」と所長につきつけられた腹いせに″マイトの心配より、出炭に注意せよ″と訓示をされたのではないかと疑いたくなります。

（三川上層三十六昇常一「ポケット・ニュース」第八号）



---

# 評点にとらわれないで

## ―通信簿の見方―

学年末。子どもにとっても親にとっても、何となく心配なのが通信簿です。この通信簿は本来、家庭と学校との協力で、子どもを育て、指導していく手段なのです。しかも、校長の権限で出しても出さなくてもよく、どのような形にしてもよいことになっています。

### 相対評価とは？

いまの通信簿の多くは、5・4…1という五段階評価の方法をとっていますが、この数字は、戦前や戦時中の「甲・乙・丙」「優・良・可」などのように子どもの能力を絶対的に評価したものではなく、学級全体のなかで学力をくらべた「相対評価」です。その割り合いはいちおう、⑤7％、④24％、③38％、②24％、①7％ということになっています。5が4になったからといって、必ずしも子どもの能力が低下したことではありません。

### 通信欄に注意しよう

5がへったとか、4が3になったとか、教科の評価だけで、一喜一憂する親が案外多いようですが、数字（それも相対評価の）だけで子どもの能力は表わせません。教科の欄だけでなく「行動・性格の記録」欄や通信欄にもよく目を通しましょう。教科の欄が子どもの知的な面を表わしているとすれば、行動の記録は、子どもの社会性という人間として大事な面を表わしています。

ふだん家庭で見ている子どもと学校で先生が見ている子どもの性格にひらきがないかを注意してみましょう。なにより、通信簿全体をよくみること、アラさがし、きょうだいや友だちと比べて批判するのはいけません。そして評点や書かれていることだけに気をとられず、子ども全体のすがたをとらえて、どのようにのばしていくかを考えることが大切でしょう。